

繊維学系学術誌

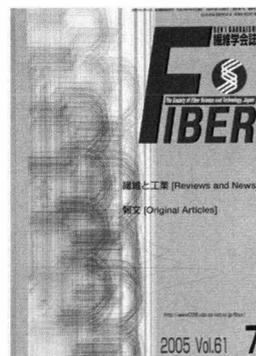
日本における繊維学・染色学・蚕糸学系学術誌

日本の繊維学系学術誌は大学当局や産業界とのかかわりなど学会設立時の事務局の所在がその後の論文傾向や内容に影響を与え、公的機関の場合には行政の意向も反映する。民俗学的視点からとらえたものや被服を含む家政学、蚕糸学、染色学、化学や材料工学、農学、医学、また教育学にも及ぶ学術領域のため、その範囲は広い。日本における繊維産業の発展の歴史は明治以降の主要な近代産業を支えた生糸の生産に始まる。戦後、日本の繊維産業は技術を基盤に成長し、繊維から衣料品の最終製品までの基礎研究はもとより、アメリカでのナイロンの発明後は、日本でもビニロンやアクリルが発明されるなど、化学繊維工業が発展する。1980年代に入ると新合繊が登場し、合繊各社の主力繊維となる。アジア諸国を中心に海外からの輸入繊維の増加により大きな転換期を迎えるなか、我が国の繊維産業活性化のためにも日本で出版される繊維学系学術誌が注目される。他に関連する国内外の繊維学系学術誌もみられるが、ここでは日本において現在刊行されている主な繊維学系学術誌と、休刊、終刊、廃刊などで刊行されていない繊維学系および蚕糸学系学術誌に大別した。

《現在刊行中の繊維学系学術誌》

「繊維學會誌」の継続前誌については、1925（大正14）年4月に繊維素協會から「繊維素工業」（本館未所蔵）が創刊され、そして繊維工業學會が1935（昭和10）年6月に「繊維工業學會誌」（本館未所蔵）の発行を始める。これらが統合して発足した繊維學會により「繊維學會誌」が1944年1月に創刊され、「繊維と工業」も1968年1月から1972年12月まで発行されていたが、その後、同学会誌に吸収される。誌面は「繊維と工業」「報文」に大別され、繊維と工業には総説として時評、連載、解説、レポートや特集記事などが組まれる。報文には一般報文、技術報文、ノート、速報があり、関連する分野が材料工学、蚕糸学、木材学のため、繊維物理や繊維化学の天然繊維から化学繊維に及ぶ最新の繊維、紙・パルプ、紡織・繊維機械、染色、仕上げ加工を含むテーマを掲載。1997年1月から、アメリカの繊維学系学術誌「Textile research journal」とのabstractsの相互交換による同時掲載論文要旨が載るようになる。

「日本家政学会誌」の繊維学系の論文に関しては、継続前誌「家政學



「繊維学会誌」
61巻7号（2005年7月）表紙

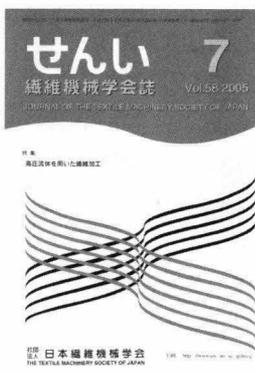
雑誌」の1巻2号（1951年7月）に「羊毛の固定について第2報」が掲載されている。第1報が「繊維學會誌」6巻1号（1950年2月）にみられることから、「繊維學會誌」からの分岐が読み取れる。学術領域は家政学と蚕糸学。繊維関係の学術論文に関しては、日本における家政学に関する文献を分野別に収録した『日本家政学文献集 第2-4集 1959-1986』（日本家政学会、1969-1988）や、文献検索の効率性を高めるためにつくられた『家政学シソーラス（第1、2版）』（日本家政学会データベース特別委員会 1992、1995）からも、家政学の一分野である被服の領域に被服材料が含まれる。本学会は家政学並びにその教育に関する研究の促進と普及を目指して創立され、定期的に被服材料学の部会も開催される。蚕糸学関連のテーマには主に糸や織物の物理特性を中心に形態安定性や光劣化の問題などがある。

『民俗服飾研究論集』は日本家政学会民俗服飾部会の年刊誌。1969年に始まったフィールドワーク服飾調査を母体に、1985年度に創刊された「日本家政学会民俗服飾部会研究調査報告」の継続後誌である。発足当初より民俗服飾すなわち民間における服飾様式やその発生と変遷などを対象とした研究部会は、各研究グループの研究組織を結成。そのなかには材料グループがあり、1麻、2絹、3木綿、4特殊衣料材料に分かれる。フィールドワークや見学会を行なうなど、研究報告も掲載される。

『繊維製品消費科学』は大阪の日本繊維製品消費科学会により1960年に月刊で創刊された。特に消費者のための生活にかかわりの深い繊維製品の消費に関する情報の提供や研究の向上などを目的とした活動が特徴で、学術領域は家政学。情報トピックスのコーナーでは世界の繊維動向、新素材の紹介がある。内容は繊維学系も含まれる消費科学全般に関する傾向にある。

『繊維機械學會誌』は繊維工業における繊維機械の発展を目的に創立した大阪の日本繊維機械學會から1948年創刊の月刊誌。誌面は一般論文と繊維工学に分かれ、繊維工学には巻頭言、特集記事、技術解説、資料、報告記、製品紹介など、またコラムの繊維関連ニュースには最新の情報を掲載。一般論文には繊維機械を基盤に繊維から最終製品に及ぶ科学・工学技術関係のものがみられる。

『家政学研究』は家政学の発展に寄与することを目的に設立された教育研究誌で、奈良女子大学家政学会から年2回刊。総説、報文、研究ノートおよび資料で構成され、繊維学系については、毎年10月号巻末の総目録でもみられる前述『家政学シソーラス』の配列に準ずる被服材料の分類に入る。家政学領域の論文については、以前は奈良女子大学の家政学部であった生活環境学部の変遷の過程など。繊維学系につ



「繊維機械学会誌」
58巻7号（2005年7月）表紙

いては中国・新疆ウイグル族の衣類に使われている素材などを調査した結果の報告や、被服材料学とのかかわりを被服整理学についての論文に収載する。

「日本衣服学会誌」は日本衣服学会が年2回発行するもので、継続前誌は1957年5月衣服學會創刊「衣服學會雜誌」。学術領域は家政学で、京都府立医科大学衛生学教室を事務局に1949年設立された「衣服研究会」が基になる。創刊時より衣服衛生学領域に関する論文を中心にした「衣」に関する研究が多いことが特徴で、その範囲内で繊維学系の論文がみられる。

「家庭科教育学会誌」（本館未所蔵）は1960年1月に創刊され、現誌名「日本家庭科教育学会誌」は1965年2月6号より。1958年、家庭科教育学会設立後に名称変更した日本家庭科教育学会から年4回の発行。学術領域は教育学で主に小学校から大学にいたる家庭科教育に関連する学会員のための、家庭科教育および家政教育に関する授業研究などを中心に研究論文や資料が掲載される機関誌。繊維学系については家庭科の「衣食住」の「衣」の領域に入るため、その領域内での記述となる。

「ファッションビジネス学会論文誌」は文化女子大学に本部があるファッションビジネス学会から1995年の創刊。学術領域は家政学で、主に服装社会学関連のものを中心とする。繊維学系である被服材料学の範囲では、絹織物や水玉模様の視覚評価に関するものなどがみられる。

「国際服飾学会誌」を発行する国際服飾学会は家政学領域に属し、日本並びに世界の服飾研究を学際的に行ない、服飾学の発展に寄与することを目的に設立され、1984年に本誌を創刊。論文、調査報告、研究資料が収載され、繊維学系は、服飾にかかわるフィールドワークによる布、繊維調査、また世界各地の民族服や染織品より各素材について詳しく述べられたものなども含まれる。

「服飾文化学会誌」は服飾文化に関する研究の促進と普及に寄与することを目的に設立された服飾文化学会より2001年にVol.1, no.1 (2000)を創刊。繊維学系については現代の服飾における新合繊についてなど、繊維と服飾に関連する論文がある。

《現在刊行されていない繊維学系学術誌》

「研究報告 / 工業技術院繊維高分子材料研究所」は工業技術院繊維高分子材料研究所からの発行。継続前誌は1929年横浜の商工省絹業試験所創刊「絹業試験所彙報」（本館未所蔵）で、1992年の175号まで刊行。1993年から2000年までのつくばの工業技術院繊維高分子材料研究所発行「物質工学工業技術研究所報告」（本館未所蔵）は継続後誌。所管の

通商産業省（経済産業省）より1980年に出された80年代ビジョンの技術立国論に基づき、80年代の研究テーマは生体適合性材料や繊維強化高性能複合材料など物質に係る新現象の探索から、さらに繊維製品生産に関連する自動化・システム化技術など工業生産システムに至る。90年代になると分子配列・複合構造の制御による新機能の発現などの分子機能材料、バイオや組換えDNA利用技術など分子生物学を基盤とする生体機能材料、分子ナノ制御材料などを対象とした分子の制御と機能、新機能高分子材料の合成などのテーマがみられる。2001年4月からは独立行政法人産業技術総合研究所となり、他の研究機関などと統合した。

「服装文化」は文化出版局からの季刊誌で、「被服文化」の誌名を134号より改め、180号（1983年10月）で終刊。150号（1976年4月）の特大号には1949年の創刊号から前号の149号までの項目別既刊総目次を掲載。9項目に大別され、材料の項目はさらに以下に分類される。A 繊維および衣料事情、B 繊維の鑑別・試験・検査、C 繊維の種類とその性質（天然繊維・化学繊維）、D 織物、E 新しい布地紹介、F 糸・編物・レース、G その他の材料（合成皮革・毛皮・紙布・不織布・その他）、H 染色加工・精練漂白・その他加工。

主なテーマをみると、A 繊維および衣料事情については、146号（1975年4月）『女工哀史』（細井和喜蔵著 改造社 1925）の発行50周年の記念特集に、「戦前日本資本主義における繊維産業と『女工哀史』」など。148号（1975年10月）織機の流れの特集では、創業1906（明治39）年の豊田式織機を発明した豊田佐吉について。164号（1979年10月）幕末・明治時代の服装文化の特集では「殖産興業政策の展開と近代的繊維産業の形成」「近代羊毛業の成立過程」。165号（1980年1月）大正・昭和前期時代の服装文化の特集では「日本における近代的繊維産業の展開とその矛盾」など。B 繊維の鑑別・試験・検査では、衣料の検査法、繊維製品品質表示法や被服材料の実験機械などの掲載。C 繊維の種類とその性質、天然繊維の絹については59号（1959年10月）「これからの絹」で、日本の絹産業の品質向上には染色、仕上げ加工の問題の改善が必要と述べられている。化学繊維については3号（1949年）で、1940年以降のアメリカのナイロンストッキング登場による絹ストッキングの衰退。E 新しい布地紹介では毎号サンプルつきで39号（1956年6月号）から紹介が始まり、59号（1959年10月号）合成繊維ファーロンが最後となる。F 染色加工・精練漂白・その他加工、57号（1959年6月号）では当時のパーリーやゴム引きの防水布「レーンコート地」を紹介。

「衣生活」は衣生活研究会より被服教育における被服科の副読本として1958年に創刊号が発行され、サンプルシートで新しい生地を提供を

行なう。天然素材から機能性繊維や複合繊維などの化学繊維を掲載。初期の頃は1号「新合成繊維時代」というタイトルにみられるような繊維に関する題材が中心。その後、繊維から最終製品までのデザインや製作プロセスを含む技術的なことからファッションビジネス、服飾史、染織史、文化史など広範な誌面構成となっていく。1993年6月には東京都中小企業関連企業支援活動の一環事業「アパレル素材のデータベース構築」、1993年10月号「繊維資源の視点から衣生活を考える」では日本の大量消費社会での繊維需要の未来を指摘。

「衣生活研究」は1974年に関西衣生活研究会より創刊。「衣生活」の趣旨に加え新構想を取り入れたことが特徴で、例えばサンプルのコーナーではスカート、制服など各アイテムの素材を広く紹介。被服生理学関係を中心に、初期の頃は小川安朗（元文化女子大学名誉教授）の「被服学の体系づけ」に始まる繊維関連の基礎知識から「素材と構成」「布の風合い」や「繊維製品の品質」などの被服材料学、さらに被服管理学や被服構成学、服装史学、染織史に及ぶ。また「やさしい科学」は材料編より始まり、その後「せんいのはなし」などの連載を展開。1976年には1971年6月の衣料管理士制度の提唱に始まる衣料管理士について、1977年「被服のための官能検査入門」、1978年「衣服と繊維・糸・布——力学的性質を中心とした相互の関係」「繊維製品の消費と流通について」「1960年代から70年代にいたる合織メーカーのファッション戦略」。1990年に入ると「先端技術と繊維」などのテーマがみられる。

「日本服飾学会誌」は1982年創刊。大阪の日本服飾学会による年刊誌であったが、20号（2001年）で休刊となる。繊維学系については「中国古代の麻織物」「絹とナイロン」「奄美の芭蕉衣」など幅広い領域の論文がみられる。

「繊維加工」は繊維技術研究社より、特に染色加工に焦点を絞り発刊された月刊誌であったが、52巻13号（2000年12月）より休刊となっている。繊維、染色、仕上げ、加工、染料、顔料、助剤、樹脂、機器に対して、論文、海外、研究資料、新製品紹介、特許の紹介、Newsの項目に分けて繊維加工技術に対する最新情報などを提供していた。

「繊維情報」は繊維工業構造改善事業協会繊維情報センターから総合的な繊維関連情報誌として月刊および年2回の臨時増刊号を発行していたが、バブル経済崩壊後の263号（1999年6月）で終刊。

現在刊行されていない蚕糸学系学術誌について、以下に述べていく。

「農林水産省蚕糸試験場研究業績一覧」（茨城県筑波郡谷田部町 農林水産省蚕糸試験場 1980）には刊行物として「蚕糸試験場報告」「蚕

糸試験場彙報」「蚕糸研究」「蚕糸試験場資料」、他に特許および実用新案登録を掲載。我が国の絹の変遷を概略すると、外貨の獲得に貢献していた時代、戦後の養蚕業の低下、それに反比例して技術が向上する過程を各論文テーマよりみることができる。

「蠶業試験場報告」（本館未所蔵）は1915（大正4）年農商務省蠶業試験場から創刊。1914（大正3）年蠶業試験場となる原蠶種製造所創設には、蚕品種統一による輸出生糸の品質向上という目的があった。1937（昭和12）年からは農林省蠶絲試験場より継続後誌「蠶絲試験場報告」として不定期刊。最終号は1988年つくばの農林水産省蚕糸試験場から。1968年「絹織物の風合に関する研究」、1969年には「絹メリヤスの構造」、1986年「セリシン蚕」などの論文がある。農林水産省蚕糸試験場に代わり、1988年10月農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所が発足。

「蚕糸・昆虫農業技術研究所研究報告」は、1988年9月が最終号の「蚕糸試験場報告」に継続するものとして1990年3月に1号が刊行され、2001年3月発行の23号が最終号。「絹短繊維の新利用技術」「繭糸織度と絹綿混紡糸の織物特性」「スパンライク新衣料絹素材の開発」など、題目からは新たな開発や新技術を目的とする研究が目立つ。蚕糸・昆虫農業技術研究所は2001年4月より独立行政法人農業生物資源研究所の一部門に統括される。

「蠶絲試験場彙報」は1937年からの農林省蠶絲試験場発行の年刊誌で、継続前誌が1917年農商務省蠶業試験場から創刊「蠶業試験場彙報」（本館未所蔵）。最終号の135号（1988年9月）は、つくばの農林水産省蚕糸試験場から。蚕や桑品種の研究を主流とし、養蚕地域における村落の構造と機能に及ぶ。生糸や絹織物については1978年「野蚕糸を用いた複合絹織物の研究」、1984年「人工飼料育蚕絹糸の物理的性質」、1988年「網状生糸及びスパンロウシルクの製織と織物性状」「絹不織布及びフェルトの試作」などがある。

「蠶絲研究」は1952（昭和27）年4月より農林省蠶絲試験場からの季刊誌。最終号142号（1988年9月）はつくばの農林水産省蚕糸試験場刊。1960年代には欧米諸国で集めた海外絹製品の分解調査の結果、高い水準の織物技術、加工、製品であることを示す。70年代は生糸品質、急増していた中国製絹織物の優れた性能、また精練・漂白並びに熱の影響による絹の黄変問題、駒ちりめんについての生糸織度の織物適合性に関する研究。1978－1980年には「生糸品質評価法の解析」について第1－4報を掲載。第4報では戦後の内需転換以降の生糸事情と、輸出生糸用に適用されていた生糸品質評価と管理の今後のあり方の考察。80年代になると「一村落における養蚕中止農家事例からみた中止要因」から養蚕業の

急速な衰退がみられる。他に人工飼料育繭糸と桑葉育繭糸の引張特性について、黒染め絹羽二重の光反射について、織物構造の測定系とデータ処理法、反射光計測法における織物データに与える走査角の影響などがある。

「蚕糸昆虫研究」は、1988年10月に発足したつくばの農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所からの年刊誌。1号が1989年9月、1994年10月の8号が最終号。「蠶絲試験場彙報」および「蠶絲研究」に続くものとして発行され、70年に及ぶ蚕糸試験場の伝統を継承し、さらに蓄積されてきた蚕糸研究の活用、およびその研究対象を広く一般昆虫としたことが特色。また生体機能の解明と利用法の開発に関する基礎研究の推進により蚕品種や繭の構造と特性などのテーマがみられるようになる。

「蠶絲試験場資料」は農林省蠶絲試験場創刊。1938（昭和13）年より1988年43号までの不定期刊。37号（1983年）「蚕繭類の新規利用に関する研究（前編）蚕糸試験場における蚕繭類、新規利用関係の研究業績」では、研究成果である新規利用関連リストとその概要、関連特許10件の概要、1958年から20年間にわたる絹の利用拡大、副産物利用、野蚕糸の加工利用、医療用等特殊利用に関連する文献リストの掲載。絹織物の新用途については戦時中に特殊利用されたタイヤ布地、落下傘布地などの論文紹介。また1958年に研究体制拡充以降、絹糸加工方面の研究が広範に行なわれ、絹糸の品質改正および用途拡大が焦点となる経緯について。38号（1983年）「蚕繭類の新規利用に関する研究（後編）蚕糸の新利用と副産物の利用——研究とその成果——」では、桑、繭、平絹、絹毛生糸短繊維や絹メリヤスについて。絹加工技術についてはかさ高、起毛、セリシン定着など。また野蚕絹糸などの製品開発に関連する文献リストと概要、実用化事例などがある。野蚕絹糸については戦時中満州で柞蚕絹糸が羊毛代用に利用されたことが掲載されている。「養蚕技術に関する調査研究——養蚕懇話会における討議を中心として——」（1978—1988）には繭質改善、蚕品種問題、養蚕から製糸まで一体となって解決されるべき問題である解舒かいじよと製糸技術などが現場から提起されている。1988年「蚕糸絹業の現状と問題点」では、蚕糸絹業の低迷から、戦前の輸出生糸に代わる新用途を開拓。

「蚕糸・昆虫農業技術研究所研究資料」は「蠶絲試験場資料」の継続後誌。農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所より1号（1989年3月）から23号（2001年3月）までの不定期刊。蚕糸試験場松本支場製糸試験部における蚕品種繰り糸試験、新規用途用原料繭の生産に関する研究会のとりまとめなど。

海外における繊維学・染色学系学術誌、抄録文献集

海外の場合、繊維学系学術誌については専門の研究所や関連する出版社等が発行している。繊維産業は産業革命以降目ざましい発展をとげ、そして各々の時代の基礎研究が基となり今日に引き継がれている。また海外の繊維学系学術誌における日本を含む中国などアジアの研究者の論文が増加する傾向は、国際競争力をキーワードにした、アジア地域における繊維および繊維製品の生産の増加や技術の向上に伴うことも一因になっていると考えられる。最近の内容の傾向は、消費社会の将来に大きく影響を与える環境問題に対する循環型社会へ対応する繊維製品の開発や高度な情報処理、バイオやナノテクノロジー領域のテーマの増加などが、新しい材料や製造工程、加工、計測法などのイノベーションのための現代の活発な研究活動拡大の原動力となっていることがわかる。このような分野が、先行する海外の研究のように日本でも発展してきている。

欧米のものを中心に最近の繊維学系の学術誌では、紙媒体の他にオンラインジャーナルによる情報提供の増加や出版物の電子化による次代に対応する情報の提供が広がりつつある。二次情報誌である抄録誌に関しては特にシステム化された情報が提供されるようになってきている。また、カラーの写真や図により一般雑誌のように初歩から高度な情報を読みやすく提供したり、表紙をカジュアルにするなど、広く読者層を拡大することを各学術誌が積極的に取り組む様子から、日本においてもこれらに追随しながら独自の方向を模索している途上にあるといえよう。

「Textile research journal」はアメリカのプリンストンにあるTRI/Princeton (Textile Research Institute) より1930年から発行されているアメリカの繊維に関する学術誌である。綿生産主要国でもあるアメリカならではの論文も多く、天然繊維からナノファイバーを含む超極細繊維、織物、織物表面化学などの仕上げ加工および繊維産業に関連する基礎、応用物理化学や工学に関する論文が掲載される。世界の大学や各研究機関で活躍する研究者による投稿が多いことから、世界を代表する繊維学系学術誌であることがわかる。最近では日本を含むアジアからの投稿者が多く、1997年より「繊維学会誌」との相互交換により巻末に“Abstracts from Sen-i Gakkaishi”が毎月同時掲載されるようになった。

「Textile world」は繊維産業関係の情報誌で、アメリカのジョージア州アトランタにあるBillian Publishing社（もとはMcGraw-Hill社）より出版されており、創刊が1868年の月刊誌。内容は5項目に分かれ、1 トピックス、2 不織布、3 ニット・アパレル、4 染色・プリント・加工、5 紡績。他に新素材や海外論文、マーケット情報など随所に取り入れている。最



「Textile research journal」
Vol.75, no.4 (2005年4月) 表紙

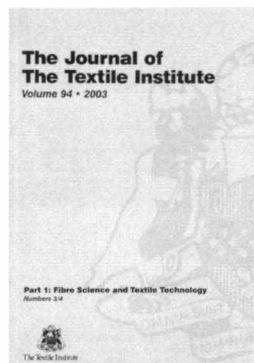
近の特集記事をみると健康織物、産業界で成功した企業の紹介、中国の繊維製品に対するアメリカのセーフガード発動問題にいたる国家の政策的な問題等多彩な誌面構成。

「**Journal of the Textile Institute**」は、1910年創刊のイギリス・マンチェスターにあるTextile Instituteの繊維学術誌。1996年より三つの分野に分かれて出版されるようになった。「**The journal of the Textile Institute. Part 1**」は年4回刊で、繊維科学と織物技術のテーマを中心とする。「**The journal of the Textile Institute. Part 2**」は年2回刊の発行で、主に繊維経済、経営、マーケティングについて。「**The journal of the Textile Institute. Part 3**」は特別号として年1回発行される。例えば、2001年には風合い計測システムを開発した故京都大学名誉教授川端季雄氏の記念号を組むなど、繊維産業のあらゆるテーマについての領域を研究対象とする。

「**Textile progress**」はTextile Instituteによる1969年創刊の年4回発行されるモノグラフシリーズの論文集で、国際的な繊維、織物およびアパレル産業などの領域に対して広範囲の情報を提供してきた。最近取り上げられたテーマをみると、「衣類の快適さの科学」「アパレル計測と適合性」「医療用織物の開発」「グローバル市場でのファッション消費者」「織物の摩擦」「人工神経ネットワークの織物への応用」など、これからの繊維産業で適用されるような実践的なテーマが多い。

「**Textile horizons**」はイギリスのウエスト・ヨークシャーのWorld Textile Publicationsから発行。以前はマンチェスターのTextile Instituteから発行されていた継続前誌の「**The Textile Institute and industry**」は、「**Journal of the Textile Institute**」の関連誌である。「**Journal of the Textile Institute**」が論文集であるのに対して、1963年創刊当時はイギリスの技術者向けの記事が多かった。1992年に誌名を「**Textile horizons international**」に変更後は、特に世界の繊維関係についての広範な記事を提供するようになっている。最近ではナノテクノロジー規格作成の進行状況や、テキスタイル展示会の予定など、世界の繊維についての情報が豊富である。

「**Textiles magazine**」は広く繊維関係の教育を目指し、また専門家の技術の促進を目的にTextile Institute より年4回の発行。1965年に創刊されたShirley Institute から年2回刊の「**The Shirley link**」(本館未所蔵)を、1972年からTextile Instituteが受け継ぎ「**Textiles**」と名称を変更した。現誌名になるのはVol.23, no.1 (1994年)からである。内容をみると、まずイノベーションのコーナーで新素材や世界各国の繊維産業などの最新情報の提供があり、その後に繊維、技術、商品、環境、経営、教育・養



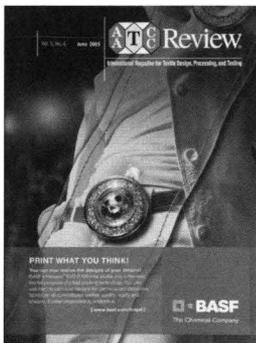
「The journal of the Textile Institute. Part 1」
Vol.94, no.3/4 (2003年) 表紙



「Textiles magazine」
Vol.32, no.1 (2005年) 表紙



「Melliand Textilberichte」
86. Jahrg., 6 (2005年6月) 表紙



「AATCC review」
Vol.5, no.6 (2005年6月) 表紙



「海外繊維技術文献集」
55巻3号 (2005年5月) 表紙

成などをテーマとした約5件の論文が掲載されている。また、とじ込み付録の"Textile Institute News"や、巻末には展示会や繊維関係の本の紹介がある。

「Melliand Textilberichte」は1920年に創刊され、紡績、織物、編み地、繊維加工、繊維工業、衣料産業の6部門で構成されている。ドイツのMelliand Textilberichteからの繊維加工を主な対象として取り扱う年9回刊の学術誌で、環境問題や品質管理、被服縫製、製織機械なども含む繊維産業全般からの最新のニュースも盛り込まれている。ドイツを中心に欧米各国からの投稿がある。最近のテーマから、繊維産業では「バイオメカトロニクス繊維素材への利用」、繊維加工については「イノベーター的な染色と加工プロセスによるリヨセル布地の差別化」「ジーンズの電気化学的な漂白加工について」など。

「Textilveredlung」はヨーロッパのドイツ語圏を対象に発行されている繊維加工専門の学術誌で隔月刊。スイスのチューリヒにあるスイス繊維・化学協会 Schweizerische Vereinigung Textil und Chemie (SVTC) からの発行。1966年から1998年まではバーゼルにあるスイス化学・染料研究者協会 Schweizerischer Verein der Chemiker-Coloristen (SVCC) と、スイス染色専門研究者協会 Schweizerische Vereinigung von Färbereifachleuten (SVF) との共同の発行であった。繊維加工、繊維化学やそれらの関連分野についての論文を掲載し、同協会の報告なども含まれる。

「AATCC review」は染色および化学薬品の繊維工業への適用に関する研究を目的に、1921年に設立されたアメリカを中心とした世界50か国の会員が所属するノース・カロライナにあるアメリカ繊維化学・色彩研究者協会 (AATCC: American Association of Textile Chemist and Colorists) 発刊の月刊誌。繊維関連の国際規格にも影響を与えるAATCC規格を制定している協会としても有名である。現誌名での発行は2001年1月からで、1999年から2000年までは誌名を「Textile chemist and colorist & American dyestuff reporter」として刊行され、継続前誌「Textile chemist and colorist」(1969-1999) と「American dyestuff reporter」(1917-1999) を統合したものである。繊維の染色化学を基礎にしたテキスタイルデザインや染色加工技術、試験法、また業界の話題や問題点などに密着した国際的な学術情報誌でAATCCの会議の予定等も含まれる。

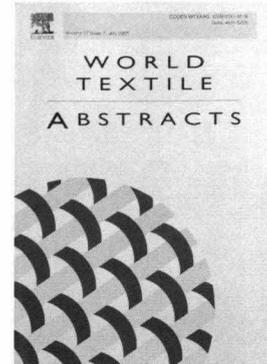
海外の繊維学系学術誌の抄録が収められた二次情報資料のなかで、日本とイギリスで発行されているものについて、以下に述べていく。

「海外繊維技術文献集」は大阪の日本繊維機械学会から1951年11月号より月刊。同学会の月刊誌「海外繊維文献抄録」(1961-1975) (本

館未所蔵)を吸収後、現在は隔月刊。欧米で広く知られている繊維雑誌から翻訳された重要文献の抄訳、その他文献抄録を掲載。各文献は題目により繊維から最終製品に至る6項目、試験法、管理および経営、基礎科学、その他の各分類項目に分けて掲載されているが、新たに2004年よりナノテクノロジーの分類項目が増え10項目となった。また1954(昭和29)年「高分子文献集」に始まる高分子学会からの月刊誌「海外高分子研究」が、高分子関係論文の最新の研究動向を抄訳し刊行されていたが、1997年12月号で廃刊となる。

「World textile abstracts」は、1910年Textile Instituteから創刊の月刊誌「Journal of the Textile Institute」に始まり、現在はオランダのアムステルダムに本部のあるElsevier社から発行されている繊維専門の抄録誌。掲載内容はイギリスやヨーロッパ、アメリカの特許や国際規格を含む世界の繊維関係の最新の情報が収められていることが特徴。500以上に及ぶ月刊誌を対象に、論文の抄録内容は11分類され、繊維、糸、織物、染色および仕上げ、繊維製品、生産技術、設備機器やコンピュータ制御、環境問題、分析・試験法・品質管理、高分子化学、一般に分かれる。

国内外の各繊維学系学術雑誌においては海外からの抄録誌の情報源として、誌面の巻末やトピック欄への掲載や、また研究部会を開催するなど積極的に情報提供を行なう傾向にある。(原口陽子)



「World textile abstracts」
Vol.37, no.7 (2005年7月) 表紙